

「アジア文化」の複層化された知の競演

江藤茂博

思考の営為は、個別の言語や地域に縛られてしまう。私たちには、その縛りを避けることも逃げることもできない。ただそれを宿命としながらも、求めてやまない異質なものと出会うことで、人は新しい思考の営為を手に入れようとする。いままでには想像すらできなかった思考の世界を、既得の言語で展開したいと願うのは、学問の第一歩なのである。

この宿命は、文学や言語学のテーマとはなったが、それを乗り越えることは学問の国際化にとっては当然のことではない。

そして、ここでの共同される思考の営為は、異質なもの同士の出会いであり、宿命への抗いであり、まさに学問の場なのである。

また、こうした雑誌というスタイルは、異質な思考の同時提示であることに、まず刺激されることになる。数種の言語が誌面に併存し、個々の言語能力に応じた強弱を持って情報が読み手に向けられている。複層化された知の競演と言ってもよいだろう。なによりも同一言語

での雑誌では、己の思考の営為の宿命性に気づくことも少ないのだ。

この号は、魯迅の特集号として編まれている。世界で広く読まれている魯迅の作品であるが、ここではあらためて世界から魯迅文学に光を向ける。それは、文化としての魯迅文学というものを浮かび上がらせることになる。個々の地域での魯迅文学の読まれかたを下地とした文芸文化の姿が現れると言い換えてもよいだろう。そして、それに耐えうるだけの作品を魯迅は生み出したのである。

また日本では、義務教育である中学校の国語科の教科書で多くの国民が魯迅の作品と出会う。もちろん、日本語に翻訳されていて、外国文学と意識されることは少ないのかもしれない。同じ時期にやはり中学校の国語科で学ぶ論語は、それが古典であることを中学生は意識すると思うが、それに比べて魯迅の小説はどのように受けとめるのであろうか。儒学文化の影響が長く続いた日本では、論語は中国の古典でもありながら、実は自分たちの古典でもあるのだ。そうした事情に加えて、日本の中学校の教員は、国語あるいは日

本文学の専門教育を受けた者たちで、中国文学の専門教育を受けた者は少ない。そのために魯迅や他の中国文学には馴染みのない国語科教員たちが教材に使うことになる。はたして、世界文学としての魯迅の小説世界に中学生たちをうまく案内してくれているのだろうか。機会があれば、世界の研究者や読者と共に、私はぜひ日本の中学校の国語科の教員の皆さんも、魯迅文学を知るためにこの特集号を手にして欲しいと思う。

こうした雑誌による文化的刺激を、絶えず世界に発信する志を持つ、編集人のひとり張仕英氏に、わずかでも協力できたことを喜びに思うことを、ここに記したい。

2019年11月30日

(勤務先：二松学舎大学 学長 教授)

“亚洲文化”的多元文化竞演平台

江藤茂博
夏晶晶 译

人类的思维活动受限于不同的语言和地域环境，我们无法摆脱这种限制与束缚。这虽然是人类的宿命，但我们又总是要努力地通过邂逅异质的事物来获得新的思维灵感，用自己掌握的语言来拓展难以想象的思维空间，这也是做学问的第一步。思维受限的人类宿命成了文学和语学的课题，但是要想实现学术的国际化，我们就必须要摆脱它。为了达成某种共识，就需要有不同人群的思想交流与碰撞，由此反抗宿命，形成学术研究的场域。

该杂志的编辑方式，首先是提供了一个异质化思考的平台，因而能够激发读者的想象。几种语言同时出现在同一本杂志里，读者可以根据各自不同的语言能力读取信息。这也可以称作是多元文化的同台竞演吧。在同一种语言的杂志里，人们就很难发现思维活动要受到语言和地域环境的束缚。

本期杂志是鲁迅研究的专辑。虽然鲁迅的作品在世界上已广为人知，但在此特辑中鲁迅文学将再次受到世界瞩目，作为文化的鲁迅文学研究成果将再次呈现给世人。换言之，我们可以从本期杂志中了解鲁迅文学在不同地区的不同解读与研究，体会到各国文化的不同的认知形态，看到经得起时间检验的鲁迅作品的真髓。

在日本，大多数国民都在义务教育

阶段的中学国语教科书中接触过鲁迅的作品。当然，这些作品是被翻译成日语的，或许很少有人会意识到它们是外国文学。对同一时期的中学语文课上出现的《论语》，学生们则会意识到它是古典作品。与之相比，他们又是如何看待鲁迅小说的呢？由于日本长期受到儒家文化的影响，《论语》虽然是中国的，但是很多日本人也把它看作是日本的。此外，日本的中学教师多是国语或日本文学的专业背景，很少有中国文学出身的。因此，正是这些不熟悉鲁迅和中国文学的国语教师在讲授着鲁迅的作品。他们能否很好地引领中学生走进作为世界文学的鲁迅小说的世界呢？我希望如果有机会，日本中学的国语教师也能和世界的研究者、读者一起看到这期鲁迅研究专辑，以进一步了解鲁迅文学的世界。

该杂志具有立意高远，文化空间广阔，以及不断向世界传递文化信息的特点。为此，应编者之一张仕英先生之邀撰写此文，如果能够助他一臂之力，则是我十分高兴的。

谨以此文记之。

2019年11月30日

（作者单位：二松学舍大学 校长 教授）

（译者单位：浙江越秀外国语学院）